

中国革命下を生きた人びと 回應革命与改革

——皖北李村的社会変遷与延續

韓敏 著 陸益龍・徐新玉 訳

江蘇人民出版社／2007年3月／313頁／24元

評者 阮雲星

浙江大学 公共管理学院准教授



本書は、著者の博士論文（1993年、東京大学）の増補版の漢訳書で、中国で著名な「海外中国研究叢書」（江蘇人民出版社）の1冊として出版されたものである。20世紀における中国農民と国家——すなわち国家がおこなった革命と改革——という広大な主題を解明するため、本書は中国安徽省北部の一宗族村落に焦点をあてて、人類学的手法によって革命・改革時代の農村の変貌と農民の対応を克明に記録し、精緻なモノグラフとして結晶させた。農民と国家（革命と改革）に関する政治人類学的言説、宗族類型学、ジェンダーの視点からみた漢民族親族論などの人類学の理論的問題にも挑んだ理論研究でもある。

本書の内容は大きく3つに分けられる。第1は、本書の問題提起、研究対象・方法および結論である（序章、第一章 蕭鼎と李家楼の概況、終章および付録）。第2は、李氏宗族村落の社会変遷と持続を帝国後期から現在まで時代順に記録復元し、検討するものである（第二章 帝国後期の李氏宗族、第三章 民国時代の社会変遷、第四章 社会主義集団化時代の李家楼、第五章 家庭生産請負制度下の李家楼）。第3は、改革時代における李村の変貌を中心に、いくつかの重要な実証的・理論的問題を総合的に考察するものである（第六章 性別、婚姻及び姻戚関係、第七章 改革開放以降の安徽省北部におけるキリスト教の伝播、第八章 儀式の復興および父系親戚、姻戚のネットワークの再建）。

社会変動下の人びと

いうまでもなく「革命と改革」は20世紀の中国社会研究において重大なテーマであるが、人類学からの重厚な研究成果は意外に少ない。本書の著者は、そのテーマに精力的に取り組んでいる学者のひとりである（関連研究として、

共同研究「中国における社会変遷と再構築——革命的実践と象徴」がある）。本書は、彼女がその重大なテーマに挑んで以来十数年の研究の成果である。しかし評者は全面的な評論をおこなうには力がおよばないので、ここではまずそこにみられる政治人類学的特色を指摘したい。

古典的政治人類学では、おもに国家なき政治共同体などにおける血縁・地縁関係と権力・秩序との関連について研究されてきた。戦後の人類学ではコミュニティ研究を背景としつつ世界の政治経済的変動が重要視されるようになり、政治人類学の視野が拡張されてきたといえる。この意味で、政治経済的変動下での一宗族村落における社会的移動に関する本書の研究は新鋭的な意味を有しており、政治学的な意味合いからも興味深い。

例えば、科举制度廃止後の社会的移動をあつかった第三章では、「李家楼」といわれる李氏宗族村落に住む李氏三兄弟の子孫たちの、清末の1870年から1949年の中華民国崩壊までの社会的移動が克明に記録分析されている。このような緻密な研究は、時代の大変革の社会的政治的意味を社会の基層部において読みとるものである。なおかつ、農村社会における民間エリート盛衰のメカニズムや草の根の秩序の論理などの問題にもふれており、社会変遷に関する政治人類学的研究に大きな示唆を与えるものといえる。

そして、現代政治人類学的研究にとって注目すべき点として、第七章であつかった、改革開放以降の安徽省北部におけるキリスト教の伝播があげられる。この点については特に、著者が本書をとおして断片的ではあるが丹念に記録した錢志宏のケースに注目することを勧めたい。晩年にキリスト教徒となる元古参の婦人農村幹部・錢志宏の精神世界とその政治心理の変化は、現代政治人類学的手法による政治文

化の解明にとって貴重な資料となるだろう。

宗族研究への貢献

もちろん、中国宗族研究に対する貢献も本書の重要な特色である。人類学における中国の宗族研究は、東南、華北に偏っている。それに対し、本書はまず綿密なモノグラフとして安徽省北部における宗族研究の空白を埋めた。そして、華南型の宗族研究だけではなく、長江下流型の宗族研究、そして華北、北西型の宗族研究との比較をおこない、安徽省北部の宗族を中国全土の中に位置づけ、宗族について学界でおこなわれてきた論議にも応えるものとなった。著者によれば、宗族が持続するための要素としては、土地などの共同財産よりも、家族の居住方式、祖先崇拜儀式や親族呼称など宗族の内部的規制、そして宗族のアイデンティティが重要である。

さらに、本書は人類学的宗族研究の中核である親族体系研究のレベルに戻り、そこでも姻戚の研究やジェンダーの視点からみた婚姻モデルの変化という魅力的で新鋭的な成果をあげているのである。例えば、本書の第八章では、父系親戚と姻戚との間における贈与慣習などの研究をとおして、現代中国、安徽省北部における漢民族の姻戚関係の特徴および重要な機能が提示された。そして、第六章に集中的に表れるように、ジェンダーの新視点からみた婚姻モデルの変化という研究成果も魅力的であった。

著者プロフィール

韓敏 かんびん

民族社会研究部准教授。

専門は、文化人類学、地域研究（中国）。

著書に、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform.* (Senri Ethnological Studies 58, National Museum of Ethnology, 2001)、『大地は生きている——中国風水の思想と実践』（共編著、てらいんく、2000）がある。